

◆頭塔の調査—第277次

1 はじめに

奈良県教育委員会が行う頭塔の復原整備事業に伴う調査。これまで、第181次（1986年度：東北部4分の1）、第199次（88年度：西北部4分の1）、第232次（91年度：東面中央部基壇から頂部までの断割）、第237次（92年度：東面北半部第1段・第2段の断割）、第247次（93年度：北面第1段・第2段の断割）、第264次（95年度：西面北半部基壇・第1段・第2段の断割）の調査を実施、頭塔の規模・構造・変遷等を解明してきた。特に、第237次調査で仏龕を伴う下層第1段石積の存在が判明した意義は大きい。第247次と264次調査では、下層第1段石積が北面・西面にも存在し、上層石積と同様に正方形平面をもつ可能性が大きくなった。しかし、これらはトレンチ調査で、しかも上層石積の遺存状況が良好な場所であったため、下層頭塔の規模・構造・築造年代等の追究には限界があった。

今回の調査は、下層頭塔の解明を第一の目標とし、江戸時代に削平されて上層石積の遺存状況がきわめて悪く、下層頭塔を広い範囲で検出できると推定できた頭塔東南部に調査区を設けた。また東面中央の断割トレンチ内をさらに掘り下げた。

2 調査地の地形と基本層序

今回の調査区は、第232次調査で設けた東面中央の東西断割トレンチを北限、東面上層第6段石積とその南への延長線を西限に、東限・南限は頭塔外周の見学用通路に面したフェンス際とした。頭塔は新薬師寺から西に伸びる舌状尾根上に載るが、調査区の東側と南側の現状は、市街地の形成に際して削られてきた切り立った崖となっており、旧地形をとどめない。調査区内の調査開始前の地形は、東面上層第5段付近から東に下がる崖状の急斜面があり、その東は緩斜面となっており、東面フェンス内

側のごく新しい石垣に続いていた。

基本層序は、急斜面の西では、上から腐蝕土、黄褐土（遺物包含層）があり、現地表下30cm以内で上層頭塔築土に達する。それに対し、急斜面以東では上から順に、近年の置土、近現代の多量のゴミ混じりの表土（厚50cm）、江戸時代前期の遺構面（この面で墓1基を検出）、陶磁器を含む淡褐土（厚70～90cm）となり、上層頭塔の築土に達する。この築土の上面は上層第5段石積際から高さ約5mの崖状に落ち、上層第1段石積の抜き取り痕跡以西では大土坑状の窪地となる。基壇部分では第1段石積際がもっとも高く、東に傾斜して基壇石積に至る。

3 主な遺構と出土遺物

下層頭塔

第237次調査では、東面中央の断割トレンチで、仏龕を伴う下層第1段石積を発見した。今回、その続きの検出を目指したが、仏龕の南端部以南は江戸時代の削平がひどく、第1段石積の残りは東面ではよくない。しかし南面は良好で、東面と細部が異なることが判明した。また、新たに東面第2段石積を良好な状態で検出した。

基壇上面石敷 過去の調査で、下層頭塔の基壇上面の舗装にはI期石敷とII期小礫敷の2時期があることが判明している。東面南端部と南面でI期石敷を良好な状態で検出した。第1段石積の階段状基底石に接続し、東面南端部では幅2mで、第1段石積の東南隅推定地から約4m北で途切れ、それより北には伸びない。石が抜かれたのではなく、元来敷かれていなかった。石敷の上面は西から東へ緩い勾配をもつ。北面でみられた外周石敷はない。石敷の東縁の方位は国土座標の方位とほぼ一致するが、東面北端部では北で西に振れるのと異なる。南面では幅1.3m分を検出したが、南半が江戸時代に破壊されている。II期小礫敷は東面でのみ検出し、従来の所見と同様に、下層石積の基部まで達していない。



図43 第277次調査遺構図 1:100

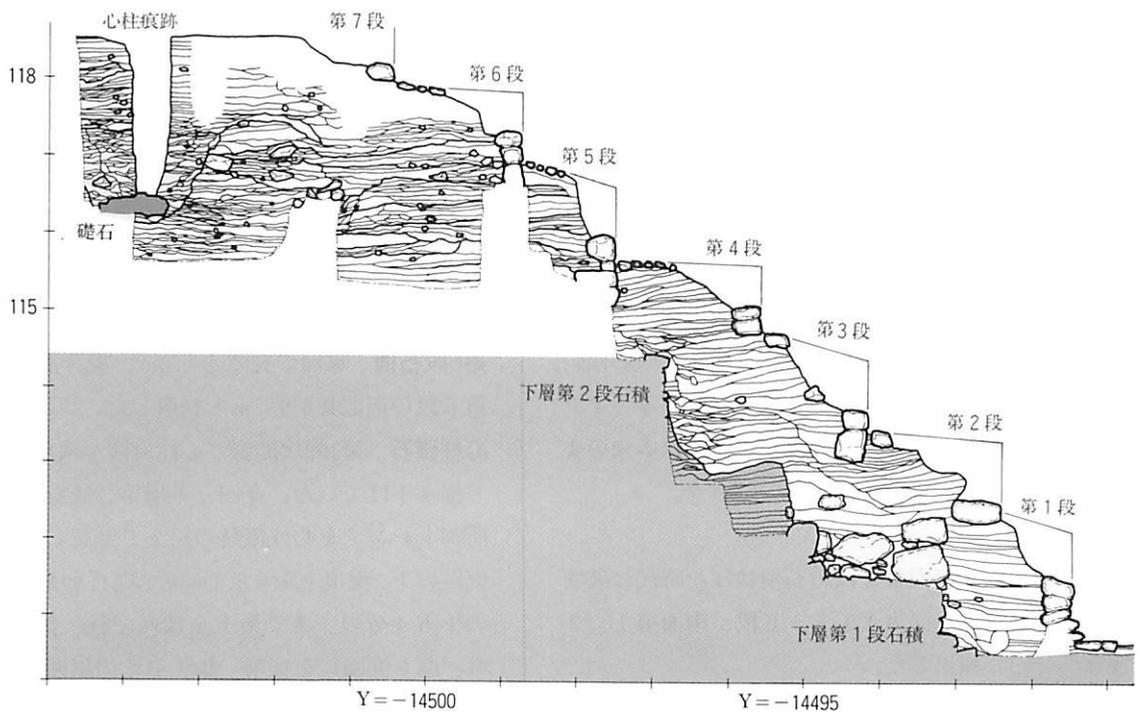


図44 頭塔断面模式図

東面第1段石積 第237次調査の所見では、基底部分が2段の階段状を呈し、その上に石積が立ち上がる。今調査区では、2段の基底部分のうち、下段石列を9m分検出。方位は北でやや東に振れる。上段石列は数石のみ残る。それより上の石積は江戸時代に破壊され、残存しない。第237次で一部検出した仏龕は、奥壁と床面の石敷は残るが、南壁はまったく残っていない。仏龕の規模は奥行き1.6m、幅1.3m以上、高さ1.5m前後に復原できる。

南面第1段石積 東西4m分を検出、第一段の南北長が21.1~21.3mと判明。西で南に振れるが、これは東・北・西面での振れと逆である。石積が緩んで、西に行くほど南へ張出している可能性がある。上層第1段石積の前面から1.15m奥にあり、東面では1.6m離れるのと異なる。石積の現存高は2.2m、東面と異なり基底部分が1段の階段状を呈する。石積の上半部は調査区の西壁際で3段の階段状を呈するが、東寄りでは2・3段目の石がないので、2・3段目の石は裏込めで石積前面に出ていなかった可能性がある。石積の下方には石を用いず築土のみを積んだ部分がある。この工法は西面でもみられた。

東面第2段石積 第1段石積から西へ約3.6mの位置で第2段石積を7.9m検出。石積南半は木の根で崩されているが、北半は残りがよく、現存高は最高部で約1.3m。

下層頭塔の規模と構造 第1段石積は東西長20.8m、南北長21.1~21.3m、第2段石積は推定南北長13.6m。段上のテラスの幅を一律に3.6mとすれば、3段目の存在を推定できるが、3段目の石積と築土は、東面中央の断割トレンチ中では確認できなかった。上層頭塔の建設時に、3段目を削平した可能性もあるが、3段目構築以前に計画変更したと考えたい。第2段石積下端と第1段石積の現存上端部との標高差は1.3mもあるが、この間のテラスはほとんど残存せず、石積の本来の高さ、テラスの傾斜、上面の舗装は不明。現状では、第2段石積の下端のすぐ際から、東へ急傾斜で築土が下がるが、これは本来の姿ではなく、上層頭塔構築時に削ったのだらう。

上層頭塔

東面第2~4段、南面第2段の石積は江戸時代に破壊され、残存しない。東面第1・5・6段、南面第1、3~5段を部分的に検出した。

基壇 長さ9.5m分を検出。第二次大戦中の防空壕で破壊された3m分を除けば、残りは比較的よい。基壇の西半

分ではIII期基壇土が残るが、東半分では東に向かって傾斜する形で削られており、斜面の途中に下層のII期小礫敷がのぞく。石積は下半分が残る。東面北半部の石積みは、第232次調査で確認されたように、14世紀以降に改修され、基壇外周に小礫敷が設けられる。

第1段石積 東面では、石積最下部の石が中央の三尊仏から南1.9m、同南6.7~7.9mの区間にだけ残る。それ以外は抜き取られ、抜き取り痕跡の肩が、III期基壇土の高まりとなって残る。南面では長さ3m、現存高70cm分を検出、第1段の南北長が24.4mと判明した。下層石積前面に上層石積を積み、裏込め土の版築作業途中で、石敷面を作っている。この仕事は西面でもみられた。

第2段石積 東面・南面ともに石積はまったく残っていない。上面石敷は南面第3段石積の際に数個だけ残る。

第3段石積 石積は南面で長さ2.4m、現存高70cm分を検出、第3段の南北長が18.9mと判明。上面石敷は南面第4段石積の際に2個だけ残る。

第4段石積 石積は南面で長さ1m分検出、第4段の南北長が15.9mと判明。上面石敷は南面第5段石積際では数個のみ残り、東面第5段石仏の前面以北でよく残る。

第5段石積 石積は南面で長さ1.5m、現存高20cm、東面で長さ6.2m、現存高40cm分を検出、第5段の南北長が12.3mと判明。東南角には大石を据えるが、落下の危険性があり除去した。東面の南から3.6mの位置で石仏1基を発見した。第5段の他の石仏より大きい石(幅90cm・厚45cm・高80cm)を用いる。格狭間を施した低い座の上に、蓮華上に座す2体の同大の如来を並列、下方左右に3体ずつ菩薩を配す。向かって左が釈迦如来、右が多宝如来であろう。この種は頭塔で初めての発見である。上面石敷は石仏以北で比較的残りがよい。

第6段石積 東面で長さを4.8m、現存高40cm分を検出、第6段の南北長が9.7mと判明した。

心柱礎石 第199次調査で心柱痕跡を検出、深さ1.8mまで掘り下げていた。今回、下層第3段石積を捜すため、断割トレンチを心柱痕跡の際まで延長したところ、心柱痕跡の下、現頂上から2.1m下で礎石を発見した。第6段の下方4分の一まで築土を積んだ後、掘形(復原径1.8m、深さ90cm)を掘削、排土をその周囲に土手状に積み上げ、礎石を据え心柱を立ててから、穴を埋め戻し、6段目上半と7段目の築土を盛る。礎石は花崗岩製。径78

cm、高さ約10cmの柱座の中央に、径22cm、高さ3.5cmの突起をもち、裏面には自然面を残す。心柱はこの突起をはずしてやや東南側に据えられている。礎石下を断割ったが鎮壇具等はなかった。落雷による火災で頂部施設が廃絶した後、心柱を抜き取り、穴底に万年通寶・神功開寶計121枚・琥珀玉5点を納め、焼土や炭混じり土で埋め戻している。銭のうち約百枚は紐に連ねた差し銭である。

その他の遺構

17世紀前葉以降の墓 調査区の南半中央部にある。方1.9mの範囲を石列で囲み、西半に墓標2基をたてる。墓標は基底部のみ残る。石列内は周囲より一段高い。緑石中2点は、舟形光背形で五輪塔を浮き彫りにした墓標を二分割して転用。寛永の銘がある。墓の背後（西側）に、舟形光背形で五輪塔を浅浮き彫りにした墓標を9基南北に並べ、南端には角柱を1基たてる。墓標には寛永（1624～44）・明暦（1655～58）・寛文（1661～73）・延宝（1673～81）の年号、角柱には「頭塔寺」「僧正玄昉之旧跡」などの銘文がある。墓の北側では、五輪塔を刻んだ石造墓標や新しい石仏を散乱した状態で検出。墓の西側に並べたものと年紀は同様である。

太平洋戦争時の防空壕 東西長3.5m以上、南北長2.6m。深さ2.3mまで下げたが、床面は未確認。

出土遺物

上層築土から奈良時代の土師器皿と瓦片、上層第5段石仏前から土師器小皿数点が出土。表土からは6235M14点、平安時代軒丸瓦1点、6732Fa23点のほか、丸瓦173.3kg、平瓦340.3kgが出土。凝灰岩製の六角屋蓋十三重塔の最上層屋蓋を表採した。

5 調査成果と課題

①下層頭塔の規模・構造がかなり明らかとなった。下層頭塔は確実に第2段まであり、三重塔として計画されたが、3段目を造る以前に上層へと計画変更したと考えたい。基壇は一辺約32m（108小尺）。本体の第1段は一辺約21m（71小尺）、第2段は方13.6m（46小尺）に復原でき、第3段は方6.4m（21.5小尺）の計画だったと推定する。第1段の高さは、第2段石積の下端までの高さとするれば3.1mとなる。第2段の高さは不明である。3段築成で、テラスの幅が広いとすれば、岡山県熊山遺跡に似た形になる。東面第1段中央には仏龕があるが、第2段

中央以南にはない。上層頭塔のように多数の仏龕をもった構造ではありえず、上層への改造に際して造立構想が大きく変わった可能性を考えたい。

②上層第4段と第5段の上面石敷を良好な状態で検出、その傾斜は第4段が5°、第5段が16°と大差があった。石仏前面の偶数段テラスが幅広く緩傾斜、石仏上の奇数段テラスが幅狭で急傾斜と敷衍できるなら、偶数段テラスは石仏巡拝の参道で、奇数段テラスにのみ屋根を葺いたと推定できる。心柱痕跡中から出土した焼けた板材や多量の漆喰から頂上に木造小仏堂を推定すれば、屋根は5重となる。従来の復原案は再検討を要する。

③上層頭塔心柱の礎石を発見した。礎石の上面はⅢ期基壇上面から5.55m上にある。第199次調査では基壇下の地山面に礎石を据えたとしたが、第6段を積み始めてからの仕事であった。心柱は礎石中央の突起をはずして据えているが、他所（たとえば東大寺）から運んだ転用品で突起があったので柱をずらした、といった事情が考えられよう。また、発見された差し銭は、頭塔を築く際の鎮壇具ではなく、落雷による火災で頂部施設が廃絶した後の祭祀にともなうものである。

④上層頭塔には、4面で合計44基の石仏を配置していた。そのうち発掘調査着手以前に14基、従来の発掘調査で12基と抜き取り痕跡5ヶ所を確認していた。今回、上層第5段で27体目の石仏を発見した。上層頭塔石仏群が表現するものについては、四方四仏および釈迦八相説（西村貞）、蓮華藏世界説（久野健）、法華経の影響を取り込んだ華嚴経世界観説（松浦正昭）がある。今回、釈迦・多宝仏が東面から出土したことは、各石仏の図像を解釈し、配置の意図さらには頭塔の造立構想を考察する上で重要な発見である。仏教美術史、図像学など各方面からの研究が期待される。

⑤下層・上層頭塔の建立年代や下層の構造について、今回の調査でも不明の点が多く残るが、下層と上層で構造に大差がある事が判明、下層から上層への改造の背後に、造立構想の大きな変更があったと推定するに至った。問題は、どの段階から実忠が関与したのかだが、それぞれの建立年代の確定とともに、今後の課題である。東南部と同様、上層の残りが悪いと推定できる西南部の発掘調査が是非必要である。（岩永省三／考古第3）